



5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

15  
508  
14



毛利初毛之十五

ア

花山院發心ハ弘徽殿ノ御恒徳薨逝御悲歎之處町尾殿得便宜書先常法支奉見被勸申御少家吏モロトモ共少家可御共之由被契申而乞剃御首之後申云トトドニカワコスガタ今一度ニ卫テ可歸參之由申遂電其時我ソハカルナリトニ涕泣詒フリ人呼鳴帝荒媛ニメ狂愚ナル如斯藤原兼信ニシテ奸也私スル皇子ソ立テ咸ソ張ントス故胡書諸ソ以テ帝ニ餌シ帝胡兒トナルソ待ニテ捨之飯九帝ノ氏弱ナル落涙シテ止其後又媛行シテ伊周口為ニ疵辱セテル圖擬鑑行得テ名ツクヘカラス然

ルニ淳屠氏花山三十三所ノ觀音順礼ノ勅ヲ以テ  
宗之知ス淳屠氏カ字人ノ心術ヲ度外ニ錯ニノ  
只佛ニ嗚呼可惡可歎

。一條院崩御之後御手習之及古トモシ御手替ニ  
入テアリケルヲ入道殿道長御覽シケル中ニ薔薇  
欲茂秋風吹破王事欲章謫臣亂國トアソバサ  
ケリケルヲ吉事ヲ思召テ令書給タリトテ令  
破給ケリ

一條院妻質アリシカトモ婦人ノ如ク道長力制ヲ受  
テ彼内驕儂不道ナルヲ警メ給フコト不能支藤

。氏政ノ私セルコト良房基経ニ崩テ道長ニ充極ス  
當時ノアリサマ枕竹子采花物語ヲ見テ可知廷臣  
人官女ハ姫行ヲ專トシ其俗源氏物語ヲ読テ可知時  
勢如此故ニ作ツ物語モ亦如此此歌曲シテ其代ノ  
政ノ知者是也遂ニ武臣ニ柄ヲ執ラレテ朝家衰  
廢セシモト道長ノ驕恩ニ依レリ嗚呼

。後三條院延久ノ善政ハ先器物ヲ作テレケリ資仲  
卿藏人頭ニ奉行ス行シ召寄セ取廻シ御覽シテ  
簾ヲ折寸法ナトサ、セ給ケリ禾ノハ穀倉院ヨリ召  
寄テ於殿上小庭貫主以下藏人少納ナト見沙汰

シテ小舍人タマタスキニテハカリケリ本末ヲハ加屋紙  
裏モニ參ソケレハ観覽アリテ破加勅封<sup>カニ</sup>解器ハ  
方櫃ヲ差テ石ヲ括テサテシニモ跨木ニ懸於穀  
倉院國々系フハ納ラレケリ仍何石トハ用石也件  
ノ器石等ニ今在穀倉院

帝仁智剛毅飛龍ノ日藤氏ノ僭驕ヲ微し源師房  
奉ケ大江臣房シ用テ親政シナシ給フ安民ノ獻  
旨ニ依テ糓穀ヲ沙汰シ給ヘリ嗚呼全集不壽  
昊天

○堀河院永長元年大田樂事咸記曰御記七月十二

日有殿上人田余事三十餘人之裝束或兼被仰  
定江惟有風流以冠笠ノ蓋為笠差骨<sup>有川</sup>院田主藏  
人少納言成定勅定少笠<sup>上志日凡流</sup>已上藏人所調備  
足顯雅慧穀經忠高足宗輔懸穀修理太夫顯李  
朝臣右中弁宗忠朝臣左中將顯李朝臣兵衛佐  
實隆朝臣侍從師重少輔李銅<sup>柏子</sup>前兵衛佐長忠  
朝臣右少弁時範民部大輔行信治部大輔敦兼仇  
良兵衛佐師時少將顯道尤馬頭師隆因幡守長  
實周防守往忠藏人盛家少輔權并重資朝臣馬  
權助家定民部權大輔基兼義作守基隆等

笛吹右馬頭兼實朝臣藏人式部正宗仲也。日々夜々在々所々諸院諸宮大殿閑白藏人所已下卿

ミ村々田条或被被召貴所或參詣神社

梅田条ハ東常ノ民俗田間戲藝也然此時朝迄

ヲ委じ事如是雅条ノ度此見ニ此後也。此藝ノ復

障セシト久シ鎌倉滅亡ノ前大ニ盛ナリ足利家中世又

一変ヒテ猿糸藝田条三倍し表シ尽シ奢シ極ム中

人間表童ノ文ヘ近世又一変ヒテ狂言ト称スル者称

タハレ彌色ノ專ニスコレ考ヘテ世ノ凡俗ソ知ルヘキヤモ

○堀河院御時殿上人競馬ニハ左ハチ綻<sup>クキツ</sup>裝束右ハ拍

杵<sup>オホ</sup>裝束ノ召ニキセラレタリ不破<sup>ハセ</sup>用普通競馬裝束

○梅步綻糸<sup>シ</sup>舞ノ者ハ赤衣<sup>シ</sup>衣拍杵<sup>ヲ</sup>舞者ハ黒袍<sup>ノ</sup>著ス今競馬ノ左右赤黒<sup>ノ</sup>袍<sup>ヲ</sup>用エル者ハ堀河院以來ノ服刀然四位黒立位綻<sup>ノ</sup>位袍<sup>ハ</sup>右肩

一巻アラスト見ヘタリ

御昇晉<sup>ル</sup>升進ト同

高象者業平ノ末葉也業平朝臣為勅使奉向伊勢之時密通於齊王<sup>ニ</sup>懷妊生男子<sup>ヲ</sup>依有露頭之怖令撰津守高階茂義為子而尚是也。

三代實祿云業平放縱ニシテ他ノ才學ナシ唯リ和  
歌ヲ能ス史ノ記ス所如此夫業平ノ嫗行伊勢物  
語ノコトキカ

○實方經廻奥列彼國依無菖蒲五月五日水艸ハ同  
事トテカツミヲ被菖テリ其後習テ今如斯新撰後  
菖火艸五月可陽書云梅菖蒲水草ナル故菖之族史五月ハ午ノ月南  
方離火ノ時ナリ水艸シ以火氣シ去ル意ニヤ

○雜役牛

俗ニ牝馬ヲサウヤクト云乘馬ニ用ヒス雜事ニ役スルノ  
稱力牛モ亦乘車ニ用ヒス雜事ニワカラ故十ルヘレ

○少將阿闍梨覓豪僧加ノ句云南無熊野三所權現  
立休ノ王子ミ後日被仰ミ入道也法性寺公然之僧加ノ句ハ  
近年御子ミ駿者ジヤトテ旁ナル事也ミ

○當時淳屠氏甚熊野ヲハ尊崇ス故佛事トアタス  
祈ノ時ハ如此唱ヘケルニコソ凡其時熊野繁昌シテ  
驕逸ノ所行多カリニヤ日矣ノ末ニ熊野別當田堪  
増力許アル桂林房ノ上座覓朝ト云僧人ニ殺サレタル  
事シ記シテ曰熊野川習雖無指事人ニ殺ノ事如  
此ミ官家此等ノ惡俗ヲ禁スス事アタス徒ニ淳

屬カ欺詭、欺

○勝光明院宝藏御座ス御影是八幡弘法大師御  
渡唐之時手自奉圖繪之御影也僧欣載日輪  
金持錫杖給大師帰朝之時奉<sup>安</sup>置高雄寺荒廢之後鳥羽上皇  
尋召被<sup>安</sup>置伴宝藏

嗚呼應袖聖主ハ儒風ノ崇辰氏王氏等ノ鴻儒<sup>シ</sup>名  
學<sup>シ</sup>講<sup>シ</sup>道<sup>シ</sup>教父<sup>シ</sup>ニ<sup>シ</sup>淳<sup>シ</sup>誣<sup>シ</sup>胡佛<sup>ニ</sup>混<sup>シ</sup>  
剝<sup>ハ</sup>我聖帝<sup>ソ</sup>乞食形<sup>ニ</sup>ス千載<sup>ノ</sup>下聞<sup>シ</sup>之歎息  
ニメヘスア可惡可誅ハ彼胡族ナリ

○園城寺ノ鐘ハ昔時代不<sup>分明</sup>粟津有<sup>男</sup>另粟津ノ尉者  
武勇ノ者ナリ建

立堂欲鑄為<sup>尋</sup>鉸下尚出雲國渡海之間大風

起浪乘帆之輩叫喚時小舟一艘小童取棍出來  
主人可乘移此船不然可入海<sup>シ</sup>自迷惑乘移之間  
小舟入海底到龍宮龍王<sup>シ</sup>逢<sup>シ</sup>云為敵徒類多被  
元畢<sup>ス</sup>今日殆可被害仍所迎申也可然者一矢可  
射鎗冠者請<sup>シ</sup>升樓相待之處大蛇來臨向サマニ  
カブテ矢ニテ射入口中矢根射切喉下大蛇退而遁  
サマニ又射中<sup>シ</sup>平<sup>ノ</sup>龍王喜<sup>テ</sup>此悅ハ隨願可<sup>シ</sup>冠者  
云雖造一堂未<sup>シ</sup>鑄<sup>シ</sup>鐘龍王其安事也トテ祈鉤之  
鐘シ下シ<sup>シ</sup>平<sup>ノ</sup>栗津建立堂<sup>ノ</sup>廣江寺時度伴寺  
破壞之後總法師一人為鐘主鎮守府將軍清衡施

金牛西於寺僧千人。其時三綱某乞集力丈人之分以  
幸而給廣江寺法師寺僧等取棲釣園城寺廣江  
寺一天台東寺也後日衆徒聞之猶作鐘主法師不  
令人入湖

右要シトリテ記之小說所謂三井寺鐘秀卿入龍  
娘宮所得ト古事談ノ說似テ異也凡寺院縁起ニ  
子カ、ルト多ニ堂信セニヤ

○安藝守其土羽後憲  
男 翹一兒之時正月戴餅之間少納  
言入道稅言少才學者者祖父文章者如文云々  
極我國歲首稻餅ノ割裂之時食卜又

是古ヨリノ風俗トミヘタリ  
○亀甲御占ニハ春日南室町西南ニ御座ス社大詔戸  
羽神ト申ス件ノ社ヲ此占ノ時奉念ミニ大詔戸ノ神  
○續古事記按此書ハ少字書にて  
此書ハ少字書にて

。送ゆめりかとくとくはまへ手も入らぬよ  
。引きもつてこうよ二三ともく。却くまよ一陣花の落みぬる  
地もぬけむ。落よれたり。人弱も、怪多様  
沙つむせぬやう。玉露丸ゆはる。吹き被月たうよ  
。あまよおうやう。皆うらうもててゆる。

林文德天白玉齋衡三年九月辛亥造酒司龐紳

從力位下。大邑刀自。小邑刀自等並預春秋。是ナリ。  
○湯川也。或人内裏へ持てよ。物をもたらすと  
うか。つりよせてもさをもひのれ。魚人酒にて  
坐して坐と云ふ。あどん。痛つてはらとあゆま  
てそとてあれば向車とする。やゑつき。少々  
人をもあくよこりされ。もんかし友君もひがれ  
お魚がほつて手を移す。御の門の事。あゆと  
あゆる。心す。近の門。アリてあどん。タチと  
手の骨と考え。セモ。一。毎宿の後。此と  
手藏うちれ。お腹せ。あく食の仰といふ。

右行院の御前にて。お馬車と奉ト。あくよ骨は不  
可。うりてうきすら。うりて。あくとび。よヤ文の  
あゆ。う。奉。そん。て。う。う。と。う。と。う。と。う。と  
手の骨。あくよ骨。う。う。と。う。と。う。と。う。と  
手の骨。あくよ骨。う。う。と。う。と。う。と。う。と  
手の骨。あくよ骨。う。う。と。う。と。う。と。う。と  
手の骨。あくよ骨。う。う。と。う。と。う。と。う。と  
手の骨。あくよ骨。う。う。と。う。と。う。と。う。と

おほきりのやうなまでもあくまで  
百揆あくまでもおもす男の役人たる内裏あ  
萬うてあれのようにうみのあとがあとされた  
ときには東の民百姓までさえて多いじる。  
史記毎かぬえりとゆめは石と漢や群臣と  
のことをほほへとほほへとほほへとほほへ  
をもられ、すねらうやアヤハのすあわせん  
こうひとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく



うかのちまかのうかと  
強敵ちまくいがいのまづれようじ若葉拂ひ放送  
すとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
ゆゑ免へテとくとくとくとくとくとくとくとく  
きくの放ぬとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
あを捨てたらあを

十日より中止仰せ候事にて冒號を書  
懸念多き事細々と申すて居候事に付し  
まわる事も承り申すれば、もとは  
八月の事であると申す

凡禽獸とあらず多ひ中世よりは後世之止水の  
次形とよぶ者壁に生肉有り彼邊の諸事跡  
多し其一既往の事也

かゆゆき入るよまきて教親の傳へゆく物事あ  
とゆほりかくちとソシテシテウタヒトモシテハ  
シテシテウタヒトモシテハ

あらへて事あるよりのハ万の事とぞうがよすりを放  
まつまつして、ひき事とぞうりても、すく人の事  
ハ僻きうぢやかさと奇きまですとまつあすと  
えまつそんとぞうめれ、新ゆと被用てふるとこ  
死せぬうりをせしれ、狂ふ地りとソムアヒリ  
ソクハナヤマトキモウイ、ソクモアヒリ  
やまゆせよ御よ隣取の者ソレでせきだと、うんえ年少  
よそと、あはは多能あはは多能とせきだと  
免たまと也及拂ひとえとえとえとえとえとえ

三

也のあれがては不稱す。いふのセキノ通之會  
所よ三事。うれが爲め文はほきて多事也  
トモ  
物事に相圖え難を免てより後事と云はば  
たのあひうらをもる由ゆるゝからあらうとも  
トモはやまの事は高のきり。ひきへまの事  
はくの事とんじはまこととあるまつてたゞも  
喰わどすとく縁を身作るよすは事うそ  
せのうひそ。

凡て事のまづよもうては事とこま事承す。

學す時の言ひとくと生て尺角、掌の事  
とくろく一場の先後四年とて曲筆し  
延にちのうとうて四きよ筋足(ミツシテ)や  
永年以てもううす政(シヤク)くうじ  
希義(ヒヨウ)や多羅(タラ)の比(ヒト)自筆(シヨウヒ)ゆかすて書  
もりとすいとせり。物事の言實、アリ  
多利(タリ)の内(ナカニ)移事(シヨウジ)とスル事(シヨウモノ)シ  
て被(ヒテ)急劇(ヒヤク)の事(シヨウ)。教代(キヤウダ)の事(シヨウ)とすくひ  
シ後記(シヨウキ)を以(ヨリ)て。うちれと思ひ今(イマ)一そちと  
て凡(ハ)初(ハ)事(シヨウ)の叶(シヨウ)。つま事(シヨウ)とす。迄(ヨリ)

人心とゆきを參り、而と幻

すまうる。そぞろにかねもくまはあはるを承  
う。左の申れどもひ事へやうにあらそつて申  
うるま、あれはあくは言とれり。さうともそんた  
めのうちの申納ま、あまよをとどちのまくは  
あら  
ち野四二歳ふらはあ、別室うつ。其人所のひと  
はあらゆすと  
ち別室のひと。主の庵とほすとあらひ、庵と  
あられあらじとやえを組みほじまく庵因と申じ  
いぬひきよる

多能今人もらをと見すとレリトモ官はる者之  
ニシテ少佐に四席坐りまつる者もる者  
ミテ勧めゆて年々ノクハツシテハシタの者  
シテナキのナリマサシテのうひてもくモ李御子  
シテアハソウトシテハシテのうひてもくモ李御子  
ナシテナキハシテハシテのうひてもくモ李御子  
ナシテナキハシテハシテのうひてもくモ李御子  
ナシテナキハシテハシテのうひてもくモ李御子  
ナシテナキハシテハシテのうひてもくモ李御子

丙戌季春

塾田祠官畧記

千秋  
大宮司

古尾張氏神之李範以来  
南家藤氏ナリ

馬場  
權宮司

神物檢校

田嶋

權宮司

補祭主 称祝師

大内

人

宇都氏 尾張鹿流主

大喜氏尾張宿移之鹿流二家也今一家断絶

檢校

中膳左座第一年老神之

八劍宮奉祀之家云々

右稱神官大喜氏一家亦神官也但大喜氏八

別當

中膳左座第二年老神之

權内人

中膳右座第一年老神之

右称三老

衣冠十人 中膳左右座各二人 三老次年老神之  
開闔一人

御司一人

中膳之内 摆其人神之

一番頭

古番直 俗云俎頭 祀師代官

林氏

二番頭

惣檢校代官

栗田氏

三番頭

大内人代官

長國氏

右称三代官

御前役

粟田真人



神官列座之日薦ノ敷等其他神役多

鄉役

粟田真人

祠官列座之時供陪膳等儀數多

厨家

粟田真人

右同上

雨師

大原氏

司神饌署四調進菓子役也

御供師

長國氏三人  
林氏殘部氏各三人

司調進神供役也

樂人

中膳家自古有其家

右中膳之内自古定其家

長役

俗云長太夫

祝部 一ノ長老

神廄司

俗云御馬屋  
別當也

祝部 一座

千草太夫

神樂役

神子座勒之算士若也

惣市

自祝部座一坐之

神樂市

自神子座一坐之

燒支

二人

雁使

一人

猿樂

宮福

林栗田大原磯部長國

下官  
八劍宮

祠官

木神官

大喜氏

日代官番頭

大喜氏代官

主殿頭

味味大原

大喜左京代官

松固氏

舊食右称兩代官

大原真人

大原真人

師役

若山氏

若山氏

御前役

大原真人

大原真人

御供師

長園氏

大原真人

此外畧之

允中薦下宮五十家

大原 松園 鏡味 若山

祝師座土師姓菊田有數家其中峯松者  
一家但同姓子神子座鏡味氏也

高倉宮祠官 松園 大原 破部

知我麻宮 俗云源太夫 祠官 破部 大原

日破宮祠官

若山 大原

永上宮祠官大原久米氏

供僧

座主

栗田如法院

身園

權座主

因定坊

寶藏坊

持福院

秉仕二人 今一人十

右天台宗屬輪王寺

神宮寺

院家

醫王院

色衣

不動院

色衣

愛染院

右真言宗

尾張氏、天孫天火明尊の少子天香山令の後胤が豊  
命の裔也。承歎よけつて尾張國造とす。元代に摂國  
はれと奉す孝徳天皇御宇尾張名譽忠令曰。神と  
人のあくよ近一里にて。以降御名。始君元年興  
貢お渡て。中紀をす。壬午季の興十八世の孫。角田之子も  
端より。負乳、父もにりて因幡郡。祖ニ。男経氣。之傳也  
祖ニ。男経氣。之傳也。大正可。御。ト。何物也。且。往。下。レ。其。女  
ね。子。若。余。多。氣。之。傳。ト。事。の。元。と。生。ト。如何。之。傳。と。文。て  
め。え。ち。多。自。と。う。か。と。れ。よ。う。ろ。あ。可。御。め。お。傳。と。  
尾張國と。三浦。之。傳。出。所。れ。の。子。孫。代。に。統。領。所。し。と。思。

檢校より御子にて改経り 他を後柳家流に尾張  
名祐仲和までか七年まで 人云あり 晴子に院寺仲  
立と御曾とて改称多き御よしに二男利仲とす  
仲通也後柳氏とすれど先に近出の勅使等々之に  
充仲子と云ふ亮仲統、今つむ後柳氏  
也名れ、今から御御前とゆうの慶流也  
仲定の妻もあひ跡至る御山に松等の也之を傳す  
豈后免改意也と又云はるゝ後、松雲  
六鶴院の因縁は後柳す仲通事務所御あり松雲と  
已り以て主と奉る事無くても田舎者以六十石村通斗云  
而中之意の也と聞一 僧百中又のモ廻とたせし健生

ちの八年より元永年にして寧八年れよ勤侍  
ノ宮子うくして都至侍りとす故 敬之令して為臣候  
仲道の宣る陽志を所某化民のよ仲秀と云て因爲あ  
徳の後所は物一冊假てに給せナ後所因意候父又  
えふたる年より傳  
そとスルハ今因修あひ立候をめの廢流の事  
此の因修あひ立候あとわせや古今のああへ根  
知因修の仲秀の裔々 島津祐代よりゆきりて  
此の系傳は了一代も化けずあるとすゆきりて  
云うてはるを承り行はる所の島津義重は永仁四年休牛年  
の尾治の系第一をとむる今又官庄内朝臣及仲物

若林前傳と云ふ事か一傳と記せりニキニ古文書す  
凡そ大経と記すと云ふ

○樂山上宮東門額ハ少輔通風の手引りを刻み因修  
家納む志波川の水を取て之に之を代へ給旨出  
教書官廳の名定後多の持荷御す御事と云  
シテテ端折の付書ハ持頭のれもいと古事記  
古事記すハいそゆ、以て約束す  
○立候と申すはアミラムアミラム、神龜家  
の多作の愚詩の事史よアマレハ平とて云ふと  
セリ也居て是も雲井社有月の神事、童言と

。蒙戸と改室よ左風のう又夢の宮沙戸主七袖の  
考く彦虎の名稱のく御多用うて舞陽沙河傳うる  
。宋承家ベイ 沙河傳シハツドウ 也而萬事ハシマツ 炎些少ハシマツ  
是名之字而字也ハシマツノシテハシマツ

馬 大刀象 象 魚 魚

そちの字書精縫アラカツル

。神道集七卷權律師快處居院 永亨五年於尾  
列朝日守書シテ 古本今在大湊真福寺藏然存  
第一第三卷七三冊餘闕矣此書固淳屠氏妄作  
不足見而今世事出自釋書而為神象之故者此

書外證佛書記之實足知其本據今有鳴神學網  
利名者未見古書故依文字附言詣以為牽合之說  
を多々ナリ小子明辨シテ 之可也

。府城 東照宮舞樂自敬公在世之時大槩定之

四月十六日

平調 立常樂 音樂 桐琴樂 音樂 案振 卍鼓

大食調 太平樂 有舞 太平

高麗音取 狗梓 有舞 陵王

前乱序芻鼓 有舞 後乱序同之

納蘿利 有舞 長慶子 音絃

毎年如此然誠公請朝家樂官使得秘曲於我

伶人自此還城樂立常樂散手破陳樂方越賀殿  
林歌等新舞也

十七日朝音樂

平調音取太立常樂 太平樂 長慶子

神行音樂

慮父而之樂

頌宮音樂

千返樂 夜半樂 賀殿

還御音樂

千秋樂 還城樂

。土佛伊勢三佐治と云玉錦鑿の白毛で男、冠を  
絞り。掛革の赤と以てゆる身とゆれ毛引陽、毛衣  
矛と穿め陰毛少と身と挂けぬ事と云ふ。とく  
に後年掛けり。陽神少の身薄ひとて深溝  
ひく。少丈時掛少の身薄ひとて記す。而は歸入  
丈象必え跨火乃與丈あくととす。而まじつ  
りくも久川うつ。後夏してひきのう今へあまよ  
や今日の午後一時。壁の内む裏の際をとめかつ  
と庭燈とぼくほくあはう。あ風とぬとす。而ま  
幕のてく。祭りと被れとあくひてく。跨火の

すと浮うてわざれとありつるや又新師又の節  
よつまにと見ゆるをうへたまへたまへたまへたま  
まみとれそとあらそとアソモスモスモスモスモス

シタモス

永樂也。永陽ハ明太宗永樂の年、湯坂<sup>トモ</sup>の又ニ  
御<sup>ミ</sup>主事郎<sup>ムシヤロウ</sup>ある中<sup>シ</sup>に<sup>シ</sup>付<sup>シ</sup>後少<sup>シ</sup>行<sup>シ</sup>流<sup>シ</sup>永<sup>シ</sup>十年  
明<sup>シ</sup>便<sup>シ</sup>書<sup>シ</sup>才<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>の移<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>人<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>後<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>授<sup>シ</sup>書<sup>シ</sup>以<sup>シ</sup>承<sup>シ</sup>  
受<sup>シ</sup>陽<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>書<sup>シ</sup>し<sup>シ</sup>人<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>他<sup>シ</sup>。永樂の古<sup>シ</sup>ハ  
中<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>キ<sup>シ</sup>所<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>。

朱子自今<sup>シテ</sup>將官無<sup>シ</sup>意思<sup>シ</sup>只似<sup>シ</sup>人<sup>シ</sup>家<sup>シ</sup>驕<sup>シ</sup>士<sup>シ</sup>京<sup>シ</sup>不<sup>シ</sup>褒<sup>シ</sup>衣<sup>シ</sup>

ハ

博帶誅道理<sup>シ</sup>詫<sup>シ</sup>詩書<sup>シ</sup>写<sup>シ</sup>好<sup>シ</sup>字<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>發遣<sup>シ</sup>如<sup>シ</sup>此<sup>シ</sup>何<sup>シ</sup>益<sup>シ</sup>於<sup>シ</sup>  
事<sup>シ</sup>語類<sup>シ</sup>

三我<sup>シテ</sup>今日軍<sup>シテ</sup>考<sup>シ</sup>者多<sup>シ</sup>四<sup>シテ</sup>年<sup>シテ</sup>五<sup>シテ</sup>年の軍<sup>シテ</sup>  
續<sup>シ</sup>ち既<sup>シ</sup>多<sup>シ</sup>の割<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>軍<sup>シテ</sup>人<sup>シ</sup>錢<sup>シテ</sup>次<sup>シテ</sup>千<sup>シテ</sup>後<sup>シ</sup>  
將<sup>シテ</sup>少年<sup>シテ</sup>の物<sup>シテ</sup>方<sup>シテ</sup>年<sup>シテ</sup>紀<sup>シテ</sup>軍<sup>シテ</sup>物<sup>シテ</sup>次<sup>シテ</sup>千<sup>シテ</sup>後<sup>シ</sup>  
半<sup>シテ</sup>許<sup>シテ</sup>人<sup>シテ</sup>五<sup>シテ</sup>月<sup>シテ</sup>と<sup>シ</sup>取<sup>シテ</sup>一<sup>シテ</sup>度<sup>シテ</sup>も<sup>シ</sup>相<sup>シテ</sup>流<sup>シ</sup>甲<sup>シテ</sup>兵<sup>シテ</sup>  
ナ<sup>シ</sup>流<sup>シ</sup>被<sup>シテ</sup>流<sup>シ</sup>うんと<sup>シテ</sup>つ<sup>シテ</sup>と<sup>シ</sup>五<sup>シテ</sup>日<sup>シテ</sup>務<sup>シテ</sup>勞<sup>シテ</sup>と<sup>シ</sup>論<sup>シテ</sup>  
再<sup>シテ</sup>レ<sup>シ</sup>亦<sup>シテ</sup>之<sup>シテ</sup>書<sup>シテ</sup>流<sup>シ</sup>て<sup>シテ</sup>修<sup>シテ</sup>。或<sup>シテ</sup>要<sup>シ</sup>  
軍<sup>シテ</sup>の内<sup>シテ</sup>假<sup>シ</sup>ノ軍<sup>シテ</sup>半<sup>シテ</sup>の文<sup>シテ</sup>用<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>の<sup>シテ</sup>多<sup>シ</sup>  
身<sup>シテ</sup>ハ<sup>シテ</sup>定<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>行<sup>シテ</sup>將<sup>シテ</sup>の<sup>シテ</sup>う<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>身<sup>シテ</sup>行<sup>シテ</sup>と<sup>シ</sup>論<sup>シテ</sup>

あめくらみそ

○萬葉十八日教喻史生尼張少アグヒ昨歌一首并短歌守大  
伴宿祢家持アシタスミヤシタスミ  
七虫例ナナムシノリ云但犯一條即令虫之無ナシムシノニシテ七虫輒弃者徒年  
半不去之雖犯七虫不必棄之違者杖一百唯犯折忍  
得弃ナシタシテ而毒例アザツキノリ云有妻吏卒者徒一年女家杖一百  
離ハラフ之詔書ハラフシヨウシキ云愍賜義夫節婦謹案先件數條立法  
之基化道之源也然則義夫之道情存無別一家同  
財カミ豈有忘モリ旧復新之志哉所以銀作敷行之歌念海  
葉アシタスミ之惑アシタスミノハラフ

少くれ、在れ、意り、伊勢並の神あらうの  
肩よ延す、獨れ、神也、忘れんす  
。又多めねすて、わがまし、行の楊枝、つづけりしと  
言ふの沙記、都うち行の楊枝と云ふ、今風俗  
とある今後多う、之傳すまつた、ハ古くまゐる

藤原大中臣 ト部

○常盤大連 中臣 天兒屋兼十九世

可多能祐大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

伊賀磨

春日社神主祖

御食子大連  
國子大連

可多能祐大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨

名代

御食子大連  
國子大連

藤原 大織冠簞子

垂目連 中臣 小錦上 鳥磨</p

田系圖平磨改中臣賜ト部姓任神祇伯皆偽說也又  
彼家說曰兜屋余十世臣乃狹山余之子雷ノ大臣始賜  
ト部姓實錄無雷ノ大臣者神功皇后紀所謂以中臣  
烏賊津使主或書雷臣以之誤傳者故但無賜ト部  
姓於雷臣不任大臣何謾為偽系虛說以欺天下  
辛

○勢田大宮西殿工前殿のうちあり御代と極すより前殿  
の字より源用御歎とぞすが御戸主を布主一神  
祭を行ひ神歎の事也御歎と草薙の神歎等有  
うそすれ、實る宝庫うき御椎足、子をよ慶也

八

後宮庫と御用御歎と作て有の文、字ふりと今ま  
すと御令一神門とのうち庭戸主の御門よろづて  
さくらすすと御歎と御用御歎ともすす半日  
代に近宮祀よろづて

○勢田大宮西殿御歎は以東友氏正原と御之也  
コ從り度と御歎の事の御后男子あじかト御兼承の  
言とて嗣とすこれ紀伊ち木通或刑部少輔高季之嗣駿河  
守清範者兼承三男也此家斷絕今ち多の御の御之也れ、方々と持すとくも宣ハトお  
印

極すよす通の高代、ちあく御よ御すとくも元或

場より核死ハシマリ又と而より死せりとて金を全くせず  
神事より多くアラムナリテアラムナリテ死キ。秋四年の母ハ年後長  
この生より乳ありトヨドウテモ皆化ヨリテモトモニシテ高義  
ノ一四事モ志意列波のソトモ多事とモ禮を拂ひトモ  
往キタムトモアラムナリテ行してトモすれハルアラム  
足見多くハ有モサセトモ四事ノ母死トモ後波儀と  
モシヌアラムナリセトモカヨハシトモトモ  
梅子トモ之の高儀中御付のちモ又ゆるとモ波役  
事役代役トモシハ母死トモ後波儀と  
以て是幼母と櫻面に通すトモカヨハシトモトモ

人ヒトヲカミアリテ國事カミツ北半軍行カミツトモ幼母  
トモ人ヒトヲカミ少供カミツの母ヒトヲカミ波モ毒カミツモ死カミツ也  
○或將カミツの少供カミツの時カミツ山神カミツ祭カミツモトモ申カミツトモ  
折敷カミツ一枚カミツ、盛カミツ餅カミツ三色カミツ、餅敷カミツ九枚カミツ

黒餅カミツ三左カミツ赤餅カミツ三中カミツ白餅カミツ三右カミツ餅長カミツ八寸廣  
三寸厚カミツ三寸

右三枚折敷各如此調進也

射手蹲踞カミツトモ白候カミツトモ中カミツ主カミツ布候カミツトモ左カミツ金  
モ後カミツ二左カミツ一右カミツ石カミツモ母ヒトヲカミ中カミツ上カミツ赤カミツ波カミツの如カミツ供カミツトモ  
波カミツトモ多カミツ少カミツ又カミツ前カミツの事カミツトモ少カミツ多カミツ自カミツ二尺カミツ也  
此カミツ候カミツの中カミツ次カミツの事カミツ少カミツ微音カミツ多カミツ音カミツと聲カミツ少カミツ多カミツ也  
廉カミツ少カミツ右カミツ廉カミツ

和歌文集一 次之卷一 五體才藻の事を持す  
今世十月吉の日候玉ある之處於度洞をすま此候と  
有の風とつも候の刻より是よりすすめ候す  
松とくとくわゆの或と用ひる者又衣奉の故より厚く  
そと中をよきとせんにゆの玉度とくとく都の故とせりや或  
書よ可く

○魚住冬支房ハ之和甲年布衣氏より屬へて行ひ  
長柄のひ魚住氏多メ音節皆多行の氏後うる家  
の酒井參列酒井本宮方大館氏ノ流也一魚住集く  
祐列氏とすの玉度り行はむ者ち魚亮子也

御りあづか村氏よ子よ落文

○源寧氏薨トテ長壽寺殿とぞセトヒ因ニ慶ニアム

○建武三年正月八日洛西峯堂合戰ノ時酒井六郎貞信

一作九郎 真信云者アリ 參列本貫の酒井トハ異ナルカ

○梅スルニ貞信ハ將軍方ノ士久下波之伯部等ト與セシ

參列酒井ハ本宮方大館氏ノ流ナソト云

○新田ハ庄也良田ハ村也  
塙田尾張守記正重卒後号正真寺殿今尾西津鳴正  
泉寺ハ塙田先祖杏丈の道場ううと有らう數くハ  
さと泉とひやうり抑淺瀬くて泉のまとうすをえつ

。觀音の年百十八日と同う中宝龜十一年僧妙觀初務  
尼ちめ記と膨ス元亨叔書。宝龜十一年七八月  
妙觀及化人十八人ともよ像と膨斯八月十八日記承と  
圓滿大入りとて親自記すと云々。據するより記し  
師戒祥原之年の多法事又大日記と記せば後  
ゆ観ノ跡事凡て十八日と同ふと云ハリ。次  
。僧階滿位法師位大法師位の介貞觀六年  
之位と立ツ法橋上之位最ゆかれて法眼上之位明證也  
法師大和尚位真雅也。二代實源もアツマリ

